瞳,,,a side story of the Harry Potter Series.

Crew Asna

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緑の瞳，，，ａ ｓｉｄｅ ｓｔｏｒｙ ｏｆ ｔｈｅ Ｈａｒｒｙ Ｐｏｔｔｅｒ Ｓｅｒｉｅｓ．

【Ｎコード】
Ｎ８４６４Ｂ

【作者名】
Ｃｒｅｗ Ａｓｎａ

【あらすじ】
いつだって姉が褒められていた。リリー、リリー。ペチュニア・エヴァンズは失望される。魔女でないというだけで。手紙が来ないだけで…。ハリー・ポッターシリーズに大きな影響を受けた著者が描く、本編で悪役を演ずるペチュニア・ダーズリーの現在まで尾をひく少女時代の悲劇。アスナクルーが手がける＜究極の二次創作＞の魔法を、どうぞゆるりとお楽しみください。

緑の瞳

by Narumi Watanabe ――Written
（This is side story of "Harry Potter Series"）

サレー州、リトル・ウィジング。地平線の東の端から朝日が昇った。空は水色に染まり渡り、朝のひんやりした空気がアスファルトの上を漂っていた。街路樹の中から鳥がさえずりながら飛び交いはじめ、さえわたる空気をふるわせてゆく。街の住宅街はまだ眠りのさなかで、住人達が部屋の中で立てるかすかな物音も、通りの外までは聞こえてこない。

通りの両脇に延々と連なる家々の、そのうち1つ、なんの変哲もないその家の玄関口にぽつんと、紫色の毛布の包みが置かれてある。包みの中では小さな男の子があたたかくくるまって眠っている。幸せそうに微笑みながら、時折口をくすぐったげにもごもごさせる。毛布に差しこまれた手紙を小さな手がきつく握り締めて、今また少し握りこむ。眠ったままのあどけない顔、くしゃくしゃの黒い髪の下にはっきりと、稲妻型の傷が刻まれている……

――プリペッド通り、4番地。

掲げられた真鍮の標札が朝日に白く燦然と輝く、その家のドアが開いた。ナイト・キャップをかぶったままの女性がミルクの瓶を出

そうとして外に出、寝起きのはれぼったい目で玄関ポーチの石段を見た。半分寝ぼけたままの目がドアのすぐ脇に置かれた毛布のかたまりを――男の子を見つけた。

耳をつんざく甲高い悲鳴が朝の静寂を砕ききった。男の子がぱっと目を開き、火がついたように泣き叫び出した。

ご近所のあちこちから眠い目や寝ぼけた顔が、何事かと窓越しに通りを見渡し始める。ペチュニア・ダーズリーはそんな重大事にも気付かないまま、金切り声を上げながら家の中へ書けこんでいった。

「バーノン！あなた！家の前に、玄関に！子供が！赤ん坊が！ああ、バーノン……」

…

平凡なはずの４番地に今異変が訪れていた。バーノン・ダーズリーは今しがた読み終えた手紙を破り捨てたくなる衝動を、氏の脳みそが持ち合わせている全身の理性に抑えつけられながら、食卓のど真ん中に放られた毛布の包みの中でぐずっている赤ん坊を、どす赤い顔で烈火のごとくにらみつけた。

「――うちで預かる！？」

赤ん坊はわかっているのかいないのか、アーウーと舌ったらずな声を出した。

ダーズリー家はもはや通常の朝ではなくなっていた。朝の８時半を過ぎているのに食卓には焦げつき寸前のトーストと電子レンジで溶かしすぎたバターしか乗っておらず、朝のニュースを見るためにつけているはずのテレビは真っ暗いまま沈黙していた。いつもなら１時間前にはその準備をして、この時間すでに片付けを行っているはずダーズリー夫人は、今朝一番のショックに呆然としてキッチンの椅子に座りこんでいる。そもそもダーズリー氏本人さえ、今ごろ

出勤して部下に対する最初の怒鳴りつけを行っているはずなのに、ワイシャツのボタンは段違いに掛かったままでネクタイすらまともに結べていない。そして何より、本来なら決しているはずのない“よそ者”が、この平凡な家の中に存在している……。

キッチンと続きになっているリビングの隅のベビーベッドでは、ダーズリー夫妻の1人息子ダドリーが紙パックのリンゴジュース――むずかる赤ん坊に父親がかろうじてあてがった朝食――を自力でストローからぐいぐい飲んでいた。キッチンの両親の間で展開されている明らかな異常自体なんてまるでお構いなしで、やがて全部飲み干したのか紙パックをぽいっと脇に投げ捨てると、今父親がにらみつけている赤ん坊の三倍の音量で力の限り泣きわめきだした。椅子の上で放心状態だったダーズリー夫人が息子の泣き声に飛び上がって駆けより、丸々太った重たい赤ん坊を抱き上げてあやした。

「ポッターが……あの狂った……奇人達……それが勝手に……死んだ」

リビングをドスドス歩き回りながらうめくように手紙の内容を反芻したダーズリー氏は、最後の言葉を終えると同時に再びキッと毛布の中の赤ん坊を睨みつけた。

「それでうちで預かる？」

ダーズリー夫人は蒼白な顔で、腕の中で暴れまくる赤ん坊を揺すり続けている。

「……馬鹿な話があるか！！」

ダーズリー氏が爆発した。毛布の中の赤ん坊がびくっと反応しておののいたように泣きだした。ダーズリー夫人は息子をあやすことに全神経を注ぎこもうとでもするかのように、かたくななまでに自分の息子の顔だけに目を落とし続ける。

ダーズリー氏は狂ったように唾を飛ばしながら怒りにまかせて喚きちらした。ヒステリーで血管が浮き出したマグマのような赤ら顔で、狼の遠吠えのようにオウオウとほえ猛り、側にあったプラスチック製のコップを握力だけで握りつぶした（中身の水がワイシャツ

の袖口をどっさり濡らした）。羊皮紙の手紙をキッチンの清潔な床に叩き付け、上等な革靴の裏で力の限りふみにじり、八つ裂きに引き裂いてやろうと靴の裏に力をかけたその時、いきなり……怒りのあまり読み落としていた最後の一文がダーズリー氏の目にとびこんできた。一瞬ダーズリー氏の顔にふっと無表情がおとずれ、次の瞬間、ダーズリー氏は凍りついた。全身の血が凝縮されたような赤ら顔からさっと明らかに血の気が落ちた。４番地が急に水をうったようになった。

「ばかな……そんなことが……まさか、法律が許さん……卑怯者めが……ばかな……」

ほんの一瞬前までの勢いはどこへやら、脂肪でたるんだ口をわななかせ、バーノン・ダーズリーは愕然としてキッチンにたち尽くす。ダーズリー氏は魚のように弱々しく口をパクパクさせ、どんどん顔から血が引いていき、アーとかエーとか赤ん坊のような呻き声を弱々しく漏らしたあと、ついにその口をつぐんだ。

ダーズリー夫人は今にも崩れ落ちそうな蒼白な顔のまま、すでに泣きやんだ息子をひたすらあやしつづけている。まだ泣き止もうとしない毛布の中の赤ん坊の気が滅入るようなぐずり声だけが、静寂のおとずれたダーズリー家のキッチンにずっと続いている。

張りつめた長い沈黙のあとで、ダーズリー氏はようやく口を開いた。あのマグマのようなすさまじかった顔色は今や真っ白に変色していた。

「あー……ペチュニアや」

ダーズリー夫人が息子を揺するのをやめた。

「その……このガキ…子供を……ハリーを……世話してやってはくれんかね……」

信じられない、という形相でダーズリー夫人が振り返った。ダーズリー氏がひるんで一歩あとじさった。

「うちで預かるということですか？」

「いや……しかし……」

ダーズリー氏は口ごもり、何か言うかわりに踏みつけてクシャクシャになった羊皮紙の手紙を靴の下からとりあげて突きつけてよこした。ダーズリー夫人は放置されて異臭を放ちはじめた生ゴミネットでも扱うかのように、爪の先で羊皮紙をつまんで受け取り、いまいましげに目を通し始める。手紙を読み進めるにつれ、夫人の顔色が真っ青から、ダーズリー氏をも上回る、今にも透明になって消えてしまいそうなほどのすさまじい真っ白に変わっていった。そしてとどめは手紙の一番最後。差しだし人の名前の後ろに追伸で書かれた最後の一文を読んだ瞬間、夫人は今にも卒倒しそうな悲鳴をあげた。

「ありえません！」

ダーズリー夫人はわななきながら悲鳴のような声をはり上げた。

「私が――あの姉の子を――世話する？あの異常な――そいつをうちのダドリーと一緒に――ミルクをあげる？おしめの世話をする？よだれを始末する？食べ散らかしを片付ける？」

「ペチュニア……」

「ありえません！」

テーブルの上で赤ん坊は泣きやみはじめている。ダドリーが失神寸前の母親の手からぶらさがった手紙の端をしゃぶりだしている。

「こんな子供……孤児院にでもぶちこんで……」

「しかし、近所の連中に見られてしまった……説明のしようが」

「浮浪児がうちの前に置き捨てられていたと、そう言えばいいでしょう！」

ダーズリー夫人は手紙を放りだし、息子を胸に掻き抱いて叫んだ。ダドリーの口からよだれが糸を引いて手紙が床に落ちた。

「ありえません！あの狂人の子供をうちで預かるなんて！育てるなんて！」

「ペチュニア…お願いだから……」

「教育費だって食費だってばかになりませんよ、洋服もなにもか

も。あなたがこんな子供の分まで食い扶持を稼ぐ必要ないでしょう！」

「手紙を読んだのか！」

「読みましたとも！姉が死んだ？その子供をうちで預かる？決まった事？その上勝手に……『戸籍も全てこちらで手続き済み』なんて……知ったことじゃありませんわ、あんな奴ら！」

「ペチュニア！」

ダーズリー氏が怒鳴った。ダーズリー夫人はぐっと押し黙った。毛布の中の赤ん坊が、小さくしゃくりあげた。

ダーズリー氏は壁の時計をちらっと見た。朝の９時――通常なら、得意先に電話で連絡を入れているはずの時間――。ダーズリー氏は急に我に帰ったように、いそいそとテーブル脇においてあった自分のブリーフケースを取った。ネクタイは奇妙にねじまがったままだった。

「仕事に行かなければ……」

「この子供はどうするんです？」

「帰ってきてから、もう一度考えよう……今日は大事な契約が入っている……２つもだ……」

ダーズリー氏はさっさと息子のほっぺたにキスをし、夫人の肩を軽く叩き、テーブルの上の赤ん坊をもう一度火のように睨みつけた。その間ペチュニアの目を一度も見ることなく、ネクタイとワイシャツが明らかにおかしいまま、ダーズリー氏は逃げるようにしてキッチンを出ていった。玄関の戸が閉まる音がした。

ペチュニアは息子をベビーベッドに入れてよろよろと夫を追いかける。しかし、玄関に辿りついた時にはすでに車は敷地から滑り出て、対向車線へはみ出しながら通りの向こうへ走り去るところだった。ドアの脇にはめこまれたガラスからそれを見送り、車が見えなくなってからペチュニアは途方にくれて玄関に座りこんだ。

プリペッド通りを朝の郵便配達オートバイが、タッタッと軽いエンジン音を立てながら一件一件回っていく。高くなりはじめた午前

中の日差しの中を、配達員が下手な口笛を鳴らしながら家々のポストに手紙を放り込んでいく。いつもと変わらない。４番地の前でも一旦止まり、玄関ポストからバサッと2通、手紙が投げこまれてペチュニアの膝の上に落ちた。２つともダイレクトメールだった。

ふいに、目の前の光景に昔の記憶が重なってペチュニアの中によみがえった。昔の話――今まで封じこめてきた屈辱的な記憶……

ここは実家じゃない、とペチュニアは必死に自分にいいきかせる。

（今は違う、何もかも変わっている……）――あの時もこうだった。実家の玄関に座りこんで、彼女宛ての手紙を待ち続けていた。今からずっと昔、夏の間中。あの姉のいた家で……姉と同じ手紙を――

＊

魔法学校から手紙がきた、とリリーがはしゃいだ声をあげた。

最初その手紙を見つけたのはペチュニアだった。玄関から手紙を取ってくるのは、家族の中で一番小さい妹の彼女の役目だった。

我が家から魔女が生まれた、と家中が大喜びになった。

「私は魔女になるのよ、ペティ」

姉は晴れやかな顔で妹の彼女に話しかけた。

「あら、あなただってきっとなれるわよ。私の妹だもの。そしたら一緒にホグワーツに行けるのよ」

魔法学校へ入学した姉が休暇で帰ってくるたび、姉の話に夢中になった。階段の動く大きなお城、しゃべる肖像画、ゴースト、おもしろい先生、魔法の数々……寝る前のベッドの中で飽きもせず、魔法学校のことを何度も空想しては心躍らせた。いつか手紙がきて、あこがれの魔法学校へ行って、思うがままに魔法を操る自分の姿を何度も夢見た。

――それがどんなに愚かだったことか。

１１歳になった年の暑くなりはじめた頃から、彼女は一日中魔法学校からの手紙を待ちわびるようになった。
マットの上に投げ出された手紙の中から、羊皮紙の、エメラルド色のインクで宛名の書かれた手紙をかき分けて探した。
夏の初めの６月があっというまに過ぎ去ったことを覚えている。彼女宛てには何も音沙汰がないうちに７月の始めも過ぎていって、姉が魔法学校から帰ってきた。
「手紙は来た？」
と、夏休みで家に帰ってきた姉は彼女に真っ先に尋ねた。
そのとき彼女は首を横に振った。

しかし７月が過ぎ、８月になっても彼女に手紙はこなかった。
夏休みに入り、一日中玄関に座りこんで手紙を待つようになった。
その頃から、それまで考えたくなかったことが頭の中に浮かび上がって、しきりに彼女の耳元でささやくようになった。
――自分がもし魔法使いでなかったとしたら？
やがて、２人目の魔女誕生への期待に満ち溢れていた家族も徐々にしぼみだした。ことあるごとに、何かからペチュニアの意識をそらそうとするように不自然によそよそしくなった。
それでも彼女はすがるように、魔法界からの手紙を待ち続けた。
――私のだけ遅れているのかもしれない。
魔法界の手紙はふくろうが運ぶのよ、と姉に言われても、彼女は玄関で待ち続けた。起きたら玄関を隅々まで探し、時折外の錆びたポストまで行ってくまなく探した。そうして夏中待ち続けた……絶望的な気分のまま。

※

一番屈辱的な思い出が残っている。ペチュニアは思い出す……

8月が終わろうとしている頃だった。その日はたしか土曜日で、郵便は午後の便で届くはずだった。

強烈にうだる午後の暑さのなか、彼女は玄関の脇の壁にぐったりもたれて床に座りこんでいた――手紙は届いていなかった。その頃にはもう、自分が何をしているのか分からなくなりかけていた。郵便の自転車がきしみながら敷地に乗り上げてくるいつもの音がしても、体を起こす気になれなかった。玄関ポストの口が開き、バサッと音を立てて手紙が3通、ペチュニアの膝に放り出された。茶封筒、勧誘の葉書が2通……あの手紙はなかった。

「ペチュニア」

姉の声がした。膝の上の手紙から彼女は顔をあげた。廊下の奥のキッチンから、姉が彼女を手招いている。彼女が起き上って重たい体を引きずりながら歩いていくと、リリーはしーっと指を唇に当てて、誰もこないか確認するように辺りを見回し、それからもう一回彼女を手招きして、キッチンの裏口からもう一度部屋の外をさっと見渡した。本当に誰も来ないのを確認すると食器の並んだ流しの上を物色して、よく磨かれたコップをテーブルの上に置いた。不審そうに見つめるペチュニアの目の前で、リリーはポケットから魔法の杖を取り出した。

「何をするの？」

ペチュニアは嫌な予感がした。

「いいから……ペティ、誰にも言っちゃだめよ。内緒なんだから」

「夏休み中の魔法はだめなんじゃなかったの？」

「大丈夫よ、ほら、見てらっしゃい」

「だめ、やめて、見つかっちゃう――」
夏休み中は魔法を使っちゃいけないことくらい、ペチュニアだって知っていた。それで魔法学校を退学寸前までいった人の話も姉から聞いたことがあった。それなのに……ペチュニアは嫌な予感がした。
必死でやめさせようと杖にしがみつく妹の手を、リリーはうっとうしげに払いのけ、次の瞬間、さっと杖を構えた。ペチュニアが止めるまもなく早口に何か唱え、コップに向かって杖先で複雑な模様を描くように、振った。
杖の先から光がほとばしってコップに当たった。コップが一瞬、紫色の煙に包まれた。やがてゆっくりと煙が消え、コップのあった場所に丸い毛皮のかたまりがあらわれた――ネズミだ。
純白のハツカネズミは一旦キュッと頭を上げると、次の瞬間テーブルから飛び下りた。床に降りた瞬間、コンとコップが床板に当たったような音がした。あっと声を上げて追ったリリーの手をかいくぐり、わずかに開いていた裏口の戸をくぐりぬけ、シュッと素早く尾をしなわせて外へと消えた……
――その光景を、ペチュニアは凍りついたように呆然と見ていた。全ての感覚が本当に冷たく凍りついてその場に立ち尽くした。
次の瞬間、ペチュニアは悲鳴を上げた。リリーが驚いてペチュニアを見た。気がふれたような悲鳴をほとばしらせながら、ペチュニアは姉のそばを逃げ出し、夢中で階段を駆け上がり、倒れこんだ自分のベッドの上に突っ伏した。全身が氷のように冷たくなって震えた……
駆けぬけたのは嫌悪だった。全身に鳥肌が立っていた。魔法のかかるあの瞬間――あれを見た瞬間、何か本能的なものが全身で悲鳴を上げた。吐き気がするほどの嫌悪が全身を駆けぬけていった。
杖を振った姉の顔――どうでもないという気楽な表情――ほとばしった光、煙、ネズミ……
震える彼女の脳裏にふいに言葉が浮かび上がって、強く残った。

――狂っている。

その後しばらくして、階下で騒ぎが起きた。
くぐもった叫び声がいくつも聞こえてきた。ようやく震えがおさまったペチュニアは恐る恐る階段を降りていって、柱の影から遠巻きにキッチンをのぞいた。
母親が羊皮紙の手紙に目を通し、滅入ったように顔をおおったところだった――魔法学校入学の手紙でないことは明らかだった――父親の低い怒った声が廊下を通って聞こえてきた。
休暇中の魔法……法律……退学になるかも……
姉はしゅんとして椅子に座り、うつむいて膝の頭のあたりを見つめている。ペチュニアは、かわいそうだとは思わなかった。それよりも……言葉にできないような残酷な思いが良心を割りこんでペチュニアの頭をもたげた。
何をした、と父親に問いつめられて姉は話しだした。
ペチュニアの元気がずっとなかったから……びっくりさせてあげようと思った、あのままじゃ体まで悪くしてしまいそうだし、ちょっとしたショックで立ち直れるかもしれないと思ったから……軽い変身術だった、一回なら退学までは行かないだろうと思った――
残酷な思いの中から、さらにむかむかする怒りがのどもとまで膨らんでせりあがった。
――私は頼んでない。“あいつ”が勝手にやったのに。
そんなの言い訳だ。単に魔法を使いたかっただけなんだ。姉はやっちゃいけないことを知っていた。やったのは姉だ。姉が勝手にやったことなのに――
この子はやさしい子だから……と、しばらくして言い出したのは祖母だった――姉が魔法学校にいくのに一番喜んでいたのは祖母だ

った。ペチュニアの神経を穏やかな声が逆なでした――もう二度と使わなければ、退学にはならないのでしょう。お役所からの手紙にもそう書いてありますし……本人も良心からでたことですし、反省もしているようですから、もう許してやりましょう……

この子は優しいから……

――この子は。

＊

赤ん坊の泣き声が聞こえた。ペチュニアは我に帰った。

呆然自失して玄関に座りこんだままだった。ペチュニアはダイレクトメールを膝から払い落としてよろめき立ち上がった。――すっかりショック状態になっていた。あの子供のせいだ、と思った。もとはといえば、あの姉のせいだ。

ふらつきながらキッチンに戻って、時計を見るともうすっかり12時を過ぎていた。ベビーベッドでダドリーが空腹で泣き叫んでいる。テーブルの上を見ると、今まさに目をさましたあの子供が、毛布の包みを崩してテーブルの上に這いだそうとしている。ペチュニアは赤ん坊のえり首をキッと引っ掴むと、猫の子でも扱うようにベビーベッドに子供を放りこんだ。放りこんでからベビーベッドにダドリーが入っていたのを思い出し、自分の息子が姉の子供と一緒にいるのが急におぞましくなってペチュニアは慌ててダドリーを抱き上げた。

ダドリーは空腹だった。自分をふるいたたせようと必死になりながら、ペチュニアはダドリーのおしめを替え、なんとかベビーチェアに腰掛けさせ、離乳食を食べさせた。自分では何も食べる気がしない……まったく手をつけていない固くなった朝食のトーストを、ダドリーが温めただけの幼児用ミネストローネに突っこんで遊び始

めたときも、ペチュニアは何も言わなかった。あの子供は放っておかれたままだった。いっそこのままあの子供を餓死なりさせてしまえば――ペチュニアは考えた――だが死体をどうするか、ご近所にどう振る舞うかを考えて、ハリー・ポッター殺害計画はとりやめた。

息子が満腹でぐずらなくなり――半分放心したまま、毎日そうしているようにリビングまで抱き上げていってベビーベッドに下ろし――姉の息子がいることはもう考えていなかった、彼女はショック状態だった――なんとかいつもの調子を取り戻そうと、ペチュニアはふらつきながらリビングを歩いていった。しかし、もう気力が弱りきってしまったようだった。すとんと膝から力が抜けて、ペチュニアはソファの側に座りこんでしまった。

リビングの高級な、ほとんど真新しいソファ……最新型の大型テレビ……窓から見える手入れされた芝生……平凡だった彼女の生活。

――あの子供のせいだ。

＊

小さかった頃、よく姉と庭で駆けてあそんだ。けんかして姉が特別起こったとき、よく近くにあるものが壊れた。

庭に居眠り運転の車が突っこんできたことがあった。姉がひかれそうになって、ペチュニアがキャッと声を上げたときには、車の真正面にいたはずの姉は一瞬のうちに脇によけていた。車は花壇に突っこんだ。ペチュニアが初めてつくった木細工の風車が粉々になった。

いつだって姉のほうがほめられていた。濃い豊かな赤毛、さめるような緑の瞳。勉強はだれよりもよくできた。明るくてやさしく、

誰からも好かれた。やせぎすで、金髪で、目つきのきつい妹の彼女とは大違いだった。姉のほうが他の家族からもずっと好かれていた。
それでも魔女でないというだけで、彼女は家族から大きく失望された。手紙がこないというそのことが、家族から大きく失望された。
あのときだってそうだ。責任は全て姉にあるのに。法律を破ったのに。リリーだから簡単に許された。いつだってそうだ――『あの子は』。
――あの子はいい子だから。あの子はやさしいから。リリー、リリー。
狂っている……あの時感じたものは今だって変わっていない。姉も、家族も、姉のまわりの連中もみんな狂っている。あれからずっと、暗い感情が底のほうでずっと燃えくすぶっている。
――狂っている。

※

11歳の8月は過ぎた。9月1日、姉が魔法学校に出発する朝、彼女はベッドの中から頑として動かなかった。
父も母も祖母も呼びに来た。それでも彼女はベッドの中で、タオルケットをかぶったまま絶対に動かなかった。部屋のドアに背をむけて、嫌気が差すような暑さの中、太陽の光があふれる窓の外をにらみながらベッドの上でじっとしていた。
「……ペティ？」
扉の掛け金がはずれるカチャッという小さな音がして、薄くドアが開いた。ドアには内側からチェーンをかけてあったせいで、それ以上は開かない。ほんの細く開いた扉のすきまから姉の声がした。
「あのね――」
「リリー」

階下から母親の声がしてリリーの言葉をさえぎった。
「汽車に遅れますよ」
「早くしなさい」
父親の声もした。
リリーは二の足をふみながら、ためらい――気配は伝わってきた――もどかしいような声で言った。
「ペティ――私、行くね？」
ペチュニアは動かなかった。扉と姉に背を向けて、かたくなに寝息を立てているふりをした。リリーは言った。
「あのね……元気でね。手紙書くからね」
いらない、という言葉がのどもとまで出かかった。タオルケットの端を噛んで飲みこんだ。
「リリー」
母親の声。リリーは扉の外から階段を振りかえり、もどかしく焦った声で必死に話しかけた。
「私、行くね、ペティ――」
ぐっと息を呑んだ音を聞いた。早く行ってしまえ。ペチュニアは戸外でぎらぎら輝きつづける太陽をにらみながら念じた。行ってしまえ。
リリーは扉の向こうから、最後にささやくように、早口に呟いた。
「ごめんね」
扉が閉まった。姉が階段を駆け下りていく音。母の声。祖母の声。玄関の戸が閉まる音。庭からエンジン音。車のタイヤが敷地から道路へ滑り出る。遠ざかっていく……
ベッドの中でタオルケットの端を噛み締めながら、ペチュニアはそのとき、この布をひきちぎってやりたいと思った。ふいに泣きたい気持ちにかられた。悔しかった。何か形のないものにうちひしがれ、悔しくて、涙だけが勝手にあふれてペチュニアの熱のこもったシーツを濡らした。
誰もいない。姉がいなくなった今、この家には誰もいない。

あの言葉がまた浮かんできて口の中にこみあげた。

――狂っている。

・・・

プリペッド通りの家の戸口に姉が立っていた。最後に見たのはずっと前、成人してペチュニアが家を出た時。そのとき最後にみた姿のまま、姉は亡霊のように静かに玄関に立ちつくしていた。ここのことは知らないはずなのに……ペチュニアは身の毛がよだつのを感じた。

「ペチュニア」

姉が口を開いた。

「何しに来たの……」

「話があるのよ」

ヒイと口から悲鳴がもれた。

「出ていって！」

「ペチュニア……」

ペチュニアは腰がくだけてよろめき、玄関の脇の壁にしがみついた。得体の知れない汚らわしいもののように姉を見、悲鳴のように叫びつづけた。

「何しに来た！私の家だ、邪魔しないで！あっちにいけ！」
「ペチュニア！」
きつい声が耳をたたいた。ペチュニアの体がびくっとして無意識のうちに動きをとめた。姉が表情に怒りの炎を浮かべていた。
ふいに胸をつかれた。怒った姉を見るのは初めてのような気がした――そんなはずはない――だが――いくら彼女が姉を憎んでも、姉は悲しい目をしていただけで、思えばずっと長いこと、怒ったところを見たことがなかった。ペチュニアは呆然として姉の顔を見つめていた。ひらめくような鮮やかな怒り……リリーの瞳に、あかるい緑の火が燃え立つようだった。
「すぐ出ていくわ、用をすませたら」
静かなはりつめた声でリリーは言った。
「何を……」
「そうしたら、あなたの前にもう二度と姿をあらわすことはない」
静かではっきりとした声だった。
「人の気も知らないで……」
「言ったわよ、すぐ出ていくから。お願いだから、話をきいて」
リリーは踏みとどまった。決して動こうとはしなかった。
その言葉を聞いて突然、閃光がはしったように唐突にペチュニアの頭の中にある事が強烈に浮かび上がって焼きついた。
――リリー・ポッターは一昨日の夜、ゴドリックの谷の自宅でヴォルデモート卿の手にかかって死んだ。
ばかな……
うたれたように動けなくなったペチュニアの目の前で、リリーは一度目を閉じ、軽く息を吸い、はき、そして口を開いた。
「私の最後の――」

＊

……目がさめた。リビングのソファに突っ伏して眠っていた。ペチュニアはぼんやりと目を開き、部屋の窓辺の観葉植物が夕日にあかく照らされているのを、うつろな目が長い間見つめていた。やがて意識がはっきりしだし、気力を振り絞って起き上がったとき、ふと自分の顔が濡れているのに気付いた。泣いていた……ペチュニアは顔をおおってうめいた。散々な一日だ。あの姉の子供のせいだ。

姉が憎い。彼女の理解できないまともでないもの一切が憎い。許せない、許さない。姉さんのせいだ。あの異常な姉のせいだ。あんな子供まで押し付けられて、人生めちゃくちゃだ。ずっとずっと憎かった……

――憎い？

ふいに透明なものが胸の脇をかすめたようだった。ペチュニアははたと顔を上げた。“憎い”？

違う？と、自分とはちがう別の声が耳元でささやく。ペチュニアのぐるぐると回りつづける頭が思う。声がささやきかける。違う。誰が憎い？憎い――

姉は死んだのに、何を憎み続ける必要があるだろう？

ふいに浮かんだ考えに、足下の地面がわっと突き動かされたような感覚に襲われた。ペチュニアの奥底にあった何かが揺らぎはじめた――ペチュニアは浮かんだ恐ろしいその考えを振り落とそうと必死で頭を振った。顔を強くおさえた――何も考えたくない……

ペチュニアは顔をおさえたまましばらく動かなかった。やがて床に座りこんだままぐったりと後ろのソファにもたれかかり、手を顔から離した。乱れた髪を直しもせず――いつもの彼女だったら絶対にありえない――虚脱したように床に座りこんでいる。ペチュニア

の光を失ったうつろな目が、目の前の夕暮れの光景をぼくぜんと眺めた。
日が暮れかかっている。日暮れの光線が通りの家々の壁と、４番地の敷地の芝生を強いオレンジ色で照らしている。窓から差しこむ夕日はペチュニアの足下まで届いて、オークションで競り落としたガラス張りのテーブルが反射で光る。ペチュニアは窓の外を眺めていて、洗濯物を今日まったくやっていないことに気付いた。こんなことはかつて一度もなかった。あの子供のせいだ、と思った。
赤ん坊の声を聞いた。
ペチュニアは弱りきった気力を振り絞って立ち上がり、リビングの中をよろめきながら歩いていった。夕暮れのオレンジ色で狂気のように染まったリビングのすみのベビーベッドに、赤ん坊が２人、転がされている。
丸々と太った息子が、黒いふさふさした髪の赤ん坊をこづいている。赤ん坊が嫌がって、髪をひっつかんでくる手に必死で応戦している。ペチュニアが近づくと、ベッドに影が差して、黒い髪の男の子がペチュニアを見上げた。男の子の瞳がペチュニアを見上げた途端、ペチュニアの中に急におぞましさがよみがえって、慌てて息子を抱き上げて男の子から引き離した。黒い髪の子供は、それでも彼女を見上げつづける。

――緑の瞳。

「お前は魔法使いなんかじゃない」
静かに言ったつもりだった。それでも声が震えていた。ペチュニアは言った。
「ありえない」
魔法なんてありえない。あるはずがない。
腕の中のダドリーが、動くおもちゃを取り上げられたせいぐずりはじめる。それすらも耳に入らない様子で、ペチュニアはベッドで

あおむけに横たわる赤ん坊をひたすら睨みつけた。
姉の瞳を目の中にやどして、赤ん坊は彼女を見上げつづける。
「お前を“まとも”に育て上げてやる」
この赤ん坊の中から、平凡でないものを全て取り払ってみせる。
――彼女の決意がすべて無駄になって、ハリー・ポッターが魔法界へ引き
戻されるのは、それから10年後のこと。
『いったい何を隠してたの？』
『やめろ。絶対言うな！』
『二人とも勝手にわめいていろ。ハリー――お前は魔法使いだ』

＞Fin.＜

――――――――――――――――――――――――
The Green Eyes
――Written by Narumi Watanabe
――Based by ‘Harry Potter Series’ J.K.Rowling
400字詰原稿用紙換算 26枚
＜※『』内の3行は「ハリー・ポッターと賢者の石」78、9ページから抜粋しました＞

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8464b/

緑の瞳,,,a side story of the Harry Potter Series.

2010年10月25日08時23分発行